

F2-47

軽井沢で過ごした文学者と軽井沢の環境についての研究

A literary person who spent time in Karuizawa and research of the Karuizawa environment

渡辺来瑠美¹, 野々村雄介¹, 木村真梨子¹, 小木曾裕²Kurumi Watanabe¹, Yusuke Nonomura¹, Mariko Kimura¹, Yutaka Kogiso²

Abstract: Many literary people exchanged and wrote works in Karuizawa, which is known as a summer resort. An environment different from other regions where rich nature and different cultures are mixed it gave a great stimulus to literary people and influenced some works.

1. 背景と目的

避暑地として知られる軽井沢は、明治19年にカナダ生まれの英国聖公会宣教師であるA.C. ショーが訪れ、軽井沢の素晴らしさを家族や友人たちに推奨したことから始まった。避暑地として発展する前の軽井沢の人は宣教師やその家族が概ね大半を占めていた。その後、訪れる人が増加していき明治30年には貸別荘やホテルの営業がはじまる。大正初期は第一次大戦後の好況により多くの資産を所有する人たちが訪れるようになり、避暑客数は外国人より上回るようになった。軽井沢と関係のある文学者たちは概ね明治時代に生まれ大正時代に軽井沢に滞在し、数多くの作品を執筆して残している。当時の軽井沢の環境が文学者たちにどのような影響を与えていたのか、文学者たちの作品・経歴などから紐解いていくことにした。

今後の歴史観光上多くの知見を得られると推測し、軽井沢の当時の環境を文学者たちの作品・経歴をもとに推測することを目的とした。軽井沢は自然景観が豊かであり、異文化のある環境が文学者たちの一部の作品に影響を与えているのではないかと推測し、調査研究することにした。

2. 研究の方法

調査方法は軽井沢観光協会の資料^{[7][8]}や参考文献^{[1]~[14]}などをもとに軽井沢に訪れたことのある文学者、文学者と関係をもつ者を対象者として文献調査した。

3. 結果・考察

軽井沢に訪れた文学者の中には生涯年数の半分を軽井沢で過ごした者や、滞在中にいくつかの作品を執筆し、生み出した5名について記す (Table 1)。

① 堀辰雄

堀辰雄 (以下堀) は大正12年に府立第三中学校校長の広瀬雄に室生犀星 (以下犀星) を紹介され、8月に犀

星をたよって初めて軽井沢へ行った (旧軽井沢)。堀は当時の軽井沢をこのような言葉で書き残している。

「一日ちゆう、彷徨ついである。みんな、まるで活動写真のやうなものだ、道で出遇うものは、異人さんたちと異国語ばつかりだ・・・心ゆくまで異人さんの匂いをかいでやろう^{[4][13]}」。

堀は大正12年から昭和26年までの間、夏の時期に軽井沢に滞在するようになった。旧中山道沿いにあるつるや旅館、万平ホテル、油屋旅館などでは犀星、芥川、川端康成 (以下川端) の他に多くの文学者が滞在中、文学論を戦わせたり交友を深めたりしていた。軽井沢滞在中、堀は「美しい村」や「風立ちぬ」などの作品を執筆している。「美しい村」には『ベランダから一帯に見下ろせるもみや落葉松の林・アカシアの並木・道の両側の落葉松』という言葉が書かれている。「美しい村」は堀の過ごした軽井沢が舞台となっており、以下のような言葉を書いている。

「私は世間から離れて、私の愛していた山村の初夏の自然の中に生を養いながら、そこで『美しい村』の一連の作品を、書くことそれ自体の喜びのうちのみ作品の主題を求めつつ書き綴った…」^[6]。

「風立ちぬ」は妻である綾子との体験を素材としており、昭和12年には作品の終章である「死のがけの谷」を川端の別荘で執筆している。作品の中には軽井沢の自然を捉えた描写が書かれている。別荘だけでなくつるや旅館や油屋旅館でも作品を執筆している。堀は軽井沢に別荘や山荘を借りたり、新居を建てたりしていた。新居の門からは落葉松の並木が続き、庭は一面の山芝、白樺の数本、ススキの幾むれなどがあつた。

② 室生犀星

堀との関係が深い犀星も大正9年から昭和36年の間に軽井沢に滞在しており、4年半の疎開生活を送ったこともある。まだ避暑客の来ない山で、春蟬の声を聞くことを楽しみにしていたため軽井沢へ行くのは毎

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

Table 1. Karuizawa stay and work of literary person about chronological table

年	明治18年	明治22年	明治25年	明治27年	明治33年	大正9年	大正10年	大正11年	大正12年	大正13年	昭和2年	昭和7年	昭和8年	昭和13年	昭和21年	昭和26年	昭和36年	昭和47年
文学者																		
① 堀辰雄														昭和8年「美しい村」の各章を翌年にかけて発表	昭和13年「風の上的足跡」発表	昭和21年「雪の下の足跡」発表		
② 室生犀星														大正12年「あにいもうと」より『文芸懇話会賞』	昭和13年「山吹」刊行	昭和23年「みづたけ」出版	昭和24年「我が妻を喪つた人」刊行	昭和26年「我が妻を喪つた人」刊行
③ 北原白秋														大正12年「水墨集」刊行	昭和13年「落葉松」発表			
④ 芥川龍之介														大正13年「軽井沢日記」を発表	大正14年「軽井沢にて」書く			
⑤ 川端康成														昭和12年「雪」刊行	昭和13年「雪」刊行	昭和16年「雪」刊行	昭和18年「雪」刊行	昭和21年「雪」刊行

凡例： ← 文学者の生きた年月 △ 軽井沢に滞在し始めた年月 ▲ 最後に滞在した軽井沢の年月 ↓ 文学者の作品や作品受賞

として書かれており、この作品を軽井沢の夏の印象記風な作品と捉えていた。作品の終わりの部分に自然の樹木の見事さについて書かれている。作品による受賞が多く、ノーベル文学賞も受賞している。

文学者の作品に

夏7月1日から9月末までと決め、山荘で時々家族と過ごしていた。滞在中は家の近くで捕まえたすいっちょの鳴き声を楽しみながら過ごした。犀星の娘である朝子も昭和2年から父と共に軽井沢へ滞在しており、東京の生活で知ったことや教えられたことよりも軽井沢で得た自然を通しての知識の方が多く、犀星の家族にとって軽井沢は故郷のようなところであった。犀星は大正13年8月に芥川と軽井沢で交遊したことがあり、軽井沢に滞在していた間に「高麗の花・山吹・みえ」などの作品を生み出している。文芸懇話会賞、読売文学賞、野間文学賞などを受賞している。

③ 北原白秋

北原白秋（以下白秋）は大正10年に軽井沢へ滞在中。当時、星野温泉で白秋等の芸術自由教育会主催の講習会開催があり、この折「落葉松」の詩の想を得た。大正12年6月にアルスより刊行した「水墨集」の中にある「落葉松・野茨に鳩」は傑作といわれている。「落葉松」には『からまつの林・かんこ鳥・浅間嶺』の軽井沢の自然や地名の言葉が書かれている。

④ 芥川龍之介

芥川は大正13年7月から約1ヶ月間、仕事と避暑を兼ねて軽井沢へ行き、つるや旅館に滞在して「軽井沢日記」を発表した。大正14年も芥川と犀星がつるや旅館に滞在して執筆しており、詩「軽井沢にて」を書いた。犀星、堀の他にも多くの文学者と交遊をしていた。

⑤ 川端康成

川端は昭和11年から軽井沢に滞在しており、別荘もっていた。別荘のあたりは幸福の谷と呼ばれている場所であり、万平ホテルの裏一帯の低地一角にある。万平ホテルの喫茶室付近一帯は落葉松やニレのすばらしい並木が続き、広い庭を持つ別荘が点在している。昭和13年に発表された「高原」の内容は軽井沢を舞台

は軽井沢でよく見られる自然や地名などが書かれていることもあり、文学者が軽井沢に滞在し、そこでの文学者同士の交遊や自然を身近に感じながら過ごしたことなどが一部の作品に影響していると考察する。宿泊施設や別荘などに滞在中に執筆していることから、夏期には仕事をする環境が良好であることが分かった。

4. まとめ

作品に軽井沢の自然や人物の描写などが書かれていることから、文学者は豊かな自然を身近に感じられる環境と他の地域と異なる異文化・異言語の混ざった環境に多くの刺激を受けていた。軽井沢にある宿泊施設では文学者たちが集まり交遊をしたり、文学論を戦わせたりする機会として利用されていた。さらに、文学者の中には軽井沢に別荘や山荘、新居を持ち、お互いの別荘に訪れていたことから文学者同士が文学について話し合える環境が軽井沢にあったと考察した。文学者の滞在時期は概ね夏であり、仕事と避暑を兼ねて軽井沢に訪れていた。この時にはすでに軽井沢が避暑地として認識されており、暑い夏を涼しく過ごせる場・仕事ができる場・人との交流を育む場として文学者から好まれていたと捉えた。

参考文献

[1]北原白秋(1967):日本詩人全集7 北原白秋:新潮社(東京都),pp357, [2]室生犀星(1967):日本詩人全集15 室生犀星:新潮社(東京都),pp332, [3]室生朝子(1980):父 犀星の秘密:毎日新聞社(東京都),pp213, [4]小久保実・荻原葉子(1984):新潮日本文学アルバム 堀辰雄:新潮社(東京都),pp108, [5]伊藤まさこ(2012):軽井沢週末だより:集英社(東京都),pp151, [6]川端康成・井上靖(1980):(人文学シリーズ)現代日本文学アルバム 堀辰雄:学習研究社(東京都),pp143, [7]一般社団法人軽井沢観光協会(2021):軽井沢:一般社団法人軽井沢観光協会(長野県),pp31, [8]軽井沢町観光経済課(2021):軽井沢案内:軽井沢町観光経済課,pp71, [9]川端康成・井上靖(1979):(人文学シリーズ)現代日本文学アルバム 芥川龍之介:学習研究社(東京都),pp235, [10]保昌正夫・大庭みな子(1984):新潮日本文学アルバム 川端康成:新潮社(東京都),pp108, [11]小川和佑(1980):文壇資料 軽井沢:講談社(東京都),pp287, [12]堀辰雄(2008):風立ちぬ 美しい村・麦藁帽子:角川書店(東京都),pp284, [13]堀辰雄(1991):風立ちぬ:集英社(東京都),pp241, [14]広川小夜子・宍戸まこと・堀多恵子・静家清・北沢興一ほか(1986):軽井沢の別荘:軽井沢新聞社(長野県),p17